

13. 血小板減少性紫斑病を発症した哺乳豚の県内初報告例

大分家畜保健衛生所

○長谷部恵理・丸山信明・広瀬英明

病鑑 人見徹・病鑑 森学・病鑑 滝澤亮・病鑑 河上友

【はじめに】特発性血小板減少性紫斑病は、人間では特定疾患として認定された国指定難病医療費等助成対象疾病となっている。豚においては希な疾病で、その発生報告例は少ない。2015年9月、この疾病が疑われる皮膚出血斑を呈した哺乳豚の死亡事例が発生し、病性鑑定を実施したので報告する。

【農場概要及び発生経過】母豚 250 頭規模の一貫生産農場。農場は母豚と子豚肥育の 2 サイトシステムで、農場主及び息子等従業員の 4 人で経営。1 腹 12 頭（8 日齢）に皮膚の出血紫斑がみられそのうち 5 頭が死亡、翌日に 2 頭死亡。また、新たに 1 腹 10 頭（8 日齢）において同症状で 2 頭死亡。

【材料および方法】発症同腹哺乳豚・母豚、続発同腹哺乳豚・母豚、同居豚について発症時と 1 ヶ月後に採血し、血液検査を実施。また、死亡哺乳豚 2 頭について病理解剖を実施し、ウイルス学的検査では、脳・扁桃・肺・顎下リンパ節についてウイルス分離及び日本脳炎ウイルス（JEV）・豚繁殖・呼吸障害症候群ウイルス（PRRSV）・豚サーコウイルス 2 型（PCV II）の遺伝子検索。扁桃及び腎臓については豚コレラウイルス（豚コ V）抗原検出。病理学的検査を主要臓器・脳・脊髄・リンパ節について実施。細菌学的検査は、定法に従い、主要臓器・脳、小腸内容物について実施。

【検査成績】

1. 病理所見：脊髄、脳及び心臓の筋線維間及び心外膜に出血巣が散在。腎臓に点状出血、リンパ節（顎下、腸骨下、肺門）が赤く腫脹し、皮下にも出血巣が散在。小腸に血様内容物。
2. 血液検査：発症同腹哺乳豚では平均値で、血小板数 $8,333/\mu\text{l}$ 、赤血球数 $142 \text{ 万}/\mu\text{l}$ と顕著な減少がみられ、続発同腹哺乳豚では平均値で血小板数 $131,000/\mu\text{l}$ 、白血球数 $2,700/\mu\text{l}$ 、赤血球数 $268 \text{ 万}/\mu\text{l}$ と各項目で減少傾向を示した。なお、1 ヶ月後の採血では、回復傾向にあった。
3. ウイルス学的検査：JEV、PRRSV、PCV II 遺伝子は陰性。豚コ V 抗原も陰性で感染を示す所見は確認されず。
4. 細菌学的検査：主要臓器・脳からは有意菌は分離されなかったが、小腸内容物より 1 頭で *Clostridium perfringens* (C.p) 1×10^6 CFU/ml、別の 1 頭で *Clostridium* 属菌が 2×10^4 CFU/ml 検出。検出菌の薬剤感受性試験の結果、2 菌種ともアンピシリン、アモキシシリン等に感受性。

【まとめ及び考察】

聞き取り調査から、殺鼠剤中毒は否定され、病性鑑定結果からも各種疾病が否定されたことから、血小板減少性紫斑病と診断。本症例では、C.p が分離され有効なアンピシリン等薬剤投与を指導し症状の改善がみられたことから今回の症例に、C.p が何らかの形で関与していると推察された。今回の事例のように血小板減少性紫斑病を呈する豚からの C.p 分離は国内初である。ヨーロッパでは、この疾病における潜在的経済損失が問題になっている。今後はこの情報を生産者に提供し、速やかに対応できる体制を作りたい。